

# 能

高柳公演



# 貞観園

国指定名勝八十周年記念事業



## 記念公演『能舞』

日時/平成29年

11月18日(土)

入場/16:00

開演/16:30 終演/17:20

会場/貞観園 貞観堂内

新潟県柏崎市高柳町同野町593

## 交歓会

日時/平成29年

11月18日(土)

入場/17:30

開会/18:00 終了/19:30

会場/高柳コミュニティセンター

新潟県柏崎市高柳町同野町1849-1

## 出演者のプロフィール



勝海 登 かつみのぼる

能楽師 親世流シナ方  
[重要無形文化財総合指定保持者]

親世流能楽の精古を13歳より初める。人間国宝の藤田大五郎・嶋澤寿・亀井忠雄各師に能楽唯子を師事する。東京芸術大学において親世流宗家・親世古近師及び藤波重清師に師事する。親世元昭・中島成晃・親世恭秀に各師事。フランス・イタリアなど海外公演多数。



一噌 幸弘 いっそう ゆきひろ

能楽師 一噌流笛方  
[重要無形文化財総合指定保持者]

安土桃山時代より続く能楽一噌流笛方の名手として能楽古典の世界で活躍する一方、篠笛や自ら考案した田楽笛、リコーダー、角笛など西洋各種の笛を演奏し作曲活動を行う。国内外の様々なジャンルとの交流にも参加。日本文化芸術財団第2回「創造する伝統賞」受賞。



柿原 光博 かきはら みつひろ

能楽師 高安流大鼓方  
[重要無形文化財総合指定保持者]

1972年生 柿原崇志の次男 父に師事  
1979年 尾崎子「玉之段」にて初舞台以後、「石橋」「乱」「翁」「遠成寺」「鷲」等を抜く。海外公演や他ジャンルとの交流にも参加。ワークショップや講演、愛好者への指導もしている。



修験道の本山、熊野の霊地。この神秘的な空間を舞台に、神の憑依を受けた巫女の舞う、妖艶で凄みのある狂乱の舞。

春霞の立つ三保の松原。富士山を背景に見せる、天人の優雅な舞い姿。

◆あらすじ  
巻納とは、巻いた納の反物のこと。とりわけ質のよいものが献上品とされました。時の帝が、霊夢をこぼしになり、熊野三社に千足(せんじやく)の巻納を奉納せよとの勅令をお出しになります。その命を受けた勅使は、熊野全国から奉納される巻納を受け取りますが、都からの使者がなかなか来ず、業を煮やしてしまいました。そうとは知らず都の使者は、途中で音無天神にお参りし、折から咲く梅の香りに心を惹かれ、和歌を一首取っていたのです。使者は、ようやく本宮に着いたのですが、納品が遅れたことを責められ、勅使に縛り上げられてしまいます。そこへ音無天神の霊が乗り移った巫女が現れ、使者が手向けた和歌によって苦しみを和らげられたと告げ、勅使にその戒めを解くように命じます。勅使は使者のような賤しい者が歌を詠めるはずないと疑うのですが、使者に詠ませた上の句に、巫女が下の句をつけてその確かさを証したので、使者は巻納を解かれ自由の身になりました。巫女は和歌の徳を褒め称えながら舞い、さらに勅使の願いに応じて祝詞をあげ、神楽を舞います。そのうちに激しい神がかりとなり、神を舞います。御幣も乱れ、飛び上がり、地に臥せるなど激しく狂い舞った後、やがて憑いていた神が上らせられたと見え、巫女は正気に立ち戻るのです。

〔演目〕能舞「巻納」(神楽の舞)  
シテ：勝海 登  
能管：一噌 幸弘  
大鼓：柿原 光博



「羽衣-和合之舞-」(シテ：勝海 登)

◆あらすじ  
春の朝、三保の松原に住む漁師・白龍は、仲間と釣りに出た折に、松の枝に掛かっていた美しい衣を見つめます。吉をかけた、その羽衣を返して欲しいと頼みます。白龍(はくりゅう)は、はじめ聞き入れず返そうとしませんでした。しかし、それがないと、天に帰れない。と悲しむ天女の姿に心を動かされ、天女の舞を見せてもらう代わりに、衣を返すことにします。羽衣を着た天女は、月宮の様子を表す舞いなどを見せ、さらには春の三保の松原を賛美しながら舞い続け、やがて彼方の富士山へ舞い上がり、霞にまぎれて消えていきました。

◆みどころ  
この曲の舞台は紀州の山中にある熊野本宮。清々しい自然に囲まれた聖域で演じられる神秘的な物語は、見る人の心を寛がせて深く広げ、郷愁とも、懐かしさとも呼べるような不思議な感情を呼び起こすでしょう。大切な巻納を届けることは二度で、和歌を詠み、神に捧げることを優先した都の使者の心がけは、神に愛でられました。一方、世の中の決まり、ことに縛られた勅使は、都の使者を縛り上げたことを神にやんわりといさめられ、決まりごとや思い込みだけではない、和歌を詠める心のあり様の素晴らしさに気づかされるのです。古来日本では、和歌には神秘的な力があると思われてきました。そこには、和歌にできた背景があるかも知れませんが、一連の場面は大きな見どころです。その内容も浮世離れした、深い森のなかの出来事にゆったりと身を置き、心で感じていただければと思います。今回は後半の巫女が舞う神楽の舞を中心にご覧頂きます。

◆あらすじ  
春の朝、三保の松原に住む漁師・白龍は、仲間と釣りに出た折に、松の枝に掛かっていた美しい衣を見つめます。吉をかけた、その羽衣を返して欲しいと頼みます。白龍(はくりゅう)は、はじめ聞き入れず返そうとしませんでした。しかし、それがないと、天に帰れない。と悲しむ天女の姿に心を動かされ、天女の舞を見せてもらう代わりに、衣を返すことにします。羽衣を着た天女は、月宮の様子を表す舞いなどを見せ、さらには春の三保の松原を賛美しながら舞い続け、やがて彼方の富士山へ舞い上がり、霞にまぎれて消えていきました。

〔演目〕能舞「羽衣」(和合之舞)  
シテ：勝海 登  
能管：一噌 幸弘  
大鼓：柿原 光博

◆あらすじ  
春の朝、三保の松原に住む漁師・白龍は、仲間と釣りに出た折に、松の枝に掛かっていた美しい衣を見つめます。吉をかけた、その羽衣を返して欲しいと頼みます。白龍(はくりゅう)は、はじめ聞き入れず返そうとしませんでした。しかし、それがないと、天に帰れない。と悲しむ天女の姿に心を動かされ、天女の舞を見せてもらう代わりに、衣を返すことにします。羽衣を着た天女は、月宮の様子を表す舞いなどを見せ、さらには春の三保の松原を賛美しながら舞い続け、やがて彼方の富士山へ舞い上がり、霞にまぎれて消えていきました。

◆あらすじ  
春の朝、三保の松原に住む漁師・白龍は、仲間と釣りに出た折に、松の枝に掛かっていた美しい衣を見つめます。吉をかけた、その羽衣を返して欲しいと頼みます。白龍(はくりゅう)は、はじめ聞き入れず返そうとしませんでした。しかし、それがないと、天に帰れない。と悲しむ天女の姿に心を動かされ、天女の舞を見せてもらう代わりに、衣を返すことにします。羽衣を着た天女は、月宮の様子を表す舞いなどを見せ、さらには春の三保の松原を賛美しながら舞い続け、やがて彼方の富士山へ舞い上がり、霞にまぎれて消えていきました。

◆あらすじ  
春の朝、三保の松原に住む漁師・白龍は、仲間と釣りに出た折に、松の枝に掛かっていた美しい衣を見つめます。吉をかけた、その羽衣を返して欲しいと頼みます。白龍(はくりゅう)は、はじめ聞き入れず返そうとしませんでした。しかし、それがないと、天に帰れない。と悲しむ天女の姿に心を動かされ、天女の舞を見せてもらう代わりに、衣を返すことにします。羽衣を着た天女は、月宮の様子を表す舞いなどを見せ、さらには春の三保の松原を賛美しながら舞い続け、やがて彼方の富士山へ舞い上がり、霞にまぎれて消えていきました。



「巻納-神楽の舞-」(シテ：勝海 登)